

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 30 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720215

研究課題名(和文) 自習用教材作成・高大連携・相同性研究に生かす、慣用句を鍵に行う前置詞棲み分け研究

研究課題名(英文) A Study on the "Habitat Segregations" of Prepositions through Idiomatic Phrases:
For the Research on Homology, Creation of Self-Study Materials, and the Cooperation
between High School and University

研究代表者

花崎 美紀 (HANAZAKI, Miki)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：80345727

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題の研究目的は、一般的に「機能語」と呼ばれる語のうち、きわめて「多義」的に見える前置詞の意味を、各前置詞の意味の「棲み分け」をもとに、また、慣用表現を手がかりに、明らかにし、日英語の相同性(英語は<有界的・結果志向・スルの>であり、日本語は<無界的・経過志向・ナル的>である)を求める手がかりとすることである。

研究成果の概要(英文)： This study has conducted a "semantic" research on very "polysemous" prepositions, which are usually regarded mistakenly as "function" words, i.e., void of semantic meanings, through looking closely at their idiomatic phrases, in order to provide a key to the homology studies on English and Japanese.

研究分野：英語学、意味論

キーワード：前置詞 多義 高大連携

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者が2009-2011年の科学研究費で従事していた研究の継続課題である。

前置詞の多義研究は、1語の多義を扱う Semasiological な研究(例: fruit は果実・結果・・・という意味があるとする研究)に終始している感があるが、本研究は、それに近似義語を扱う Onomasiological な視点(例: 果実を表す語には fruit・nut・・・があるとする視点)を加え、その Onomasiological な意味の重なり緊張関係が意味拡張を阻止すると考えている。先行研究の中には、2語以上を扱う研究もあるが、それらの違いを述べるにとどまり、その違いが意味拡張を制限するといったような「動的」な研究はまだない。

研究代表者は、以前、前置詞の多義を従来の意味論でしばしば行われるように Semasiological な視点で研究してきた。しかし、その一連の研究で、従来のメタファー・メトニミーによって意味拡張を説明しようとする理論は、(1)意味が際限なく広がることを阻止することはできず、(2)新しい意味の予測が不可能であることがわかった。そこで、意味拡張は、複数の可能性が緊張関係の中に存在した後、それぞれの語の弁別的意味要素により取捨選択されることを通して行われるという見解、つまり、pragmatic strengthening を中心とした行為理論によって意味「用法」の拡張の可能性を探り、さらに、Onomasiological な視点にたち、近似義語の中心義が意味拡張を制限するという立場をとれば、上述の問題は解決されることに気がついた。さらに、その緊張関係の中で、意味拡張の可能性を阻止されたものは、慣用表現としてのみ存在しうるということがわかった。これまで前置詞は、機能語として意味論で語られることはほとんどなく、意味論で語られる場合は、一つの語の多義を記述する研究がほとんどであった。

例えば、for の多義を説明するためには、同じように、2つのものが空間的に並列されることを表すことのできる with や by との関係を見ることにより、際限ない意味拡張を防いだ意味記述が可能となる。また、「～の間中」という意味は、by や during を始めとするその他の前置詞によって表される可能性があり、それらが共存する緊張関係にあったと思われるが、繰り返し使われる中で during が選択され、Onomasiologically に意味拡張を阻止された by は by day という慣用表現のみ存在し続けているといえる。

2. 研究の目的

これまでの前置詞研究は、1つの語の多

義を記述するものがほとんどであった。しかし、研究代表者の一連の研究により、多義の説明には、関連する語との関係を語ることが不可欠であるということが明らかになった。

(例えば、for の多義を説明するためには、with との関係を見るのが必須である。メタファー・メトニミーのみで意味拡張を説明すると、どんなドメインにも広がることができ、意味が際限なく広がることを阻止出来ない。意味拡張を制限する存在としての、近似義語(with)研究なしでは、for の多義は説明し得ない。)

よって、本研究は、前置詞の中でも、「近接性」を表すすべての前置詞の棲み分けを明らかにすることを通して、前置詞の多義を研究しようとするものである。

また、英語らしさ・日本語らしさに関する研究は近年、相同性研究(cross-categorical studies)としてまとまりつつあるが、それらの研究が扱う言語事象の多くは文・談話レベルのものである。本研究は、語レベルで、しかも、一般的には「機能語」と呼ばれる語に意義を見だし、それらの語も他レベルと相同的であることを述べようとするものである。

まとめると、本研究は、日英語の相同性研究に語レベルの研究として寄与し、また、エラーナリシスおよび教材開発を通して高大連携と自学自習用教材として結実させることが目的であるといえる。

3. 研究の方法

本研究は、前置詞研究において、Semasiological な視点と Onomasiological な手法を使い、また、Onomasiological な視点は、慣用表現に注目することにより、近似義語の動的な棲み分けを記述する。また、その中には、歴史的研究をも取り入れる。

具体的には、2段階にわけて研究を行い、3方法で研究結果を社会に還元する。

第1段階として Semasiological な研究を行い、1語の現代英語における用法を整理しそこから仮の意味ネットワークを作成しそれを古い英語における用法を整理して補強する。

具体的には、対象語の現代英語での用法を、先行研究渉猟結果を参考にしながら整理し、仮の意味ネットワークを作成する。その手順は次(1)~(8)の通りである。なお、古英語期・中英語期・初期近代英語期の英語についても以下の(1)~(7)の作業をし、また、(9)をする。

(1) 採集したデータを使って、対象語の現代英語での用例を収集する。

(2) それらの用例を意味に従っていくつかのグループに分類する。

(3) それぞれのグループのイメージスキーマを作成する。

(4) イメージスキーマの共通点・相違点を手がかりに、近い用法どうしを結びつける。

(5) 結果として中心にくる用法を**中心スキーマ**と認定する。

(6) 他の用法とつながらない用法(**孤立用法**)を確認する。

(7) 「慣用表現」を確認する。

(8) 高校生の起こしやすい間違いがなぜ起こるかを確認する。

(9) 過去の用法について、他言語(特にフランス語、北欧語)での用法が影響を与えている可能性について調査する。

第2に、Onomasiological な研究を行い、関連する語を、孤立用法・慣用表現を元に検証し、対象前置詞の棲み分けを明らかにする。言い換えると、Onomasiologically に、関連する語を、孤立用法・慣用表現をもとに検証し、対象前置詞の棲み分けを明らかにする。そして、前置詞の Word Net を構築する。

研究結果の社会への還元は3方法による。すなわち、高大連携の中でその研究結果をもとに、大学生および高校生への正しい前置詞の使い方を指導する。また、モジュール教材(テーマ別の小教材)としてサーバーに蓄積し、ゆとり教育の元で教育されてきて実力にばらつきのある大学生が自学自習できるような教材として提供する。そして、研究結果は報告書として本に結実する。

4. 研究成果

本研究は、前述の通り、研究代表者が2009-2011年の科学研究費で従事していた研究の継続課題である。

本研究の意義・重要性は次の4点である。

<1点目>前置詞をそれらの「棲み分け」を元に研究するという点。これまでの前置詞研究は、1つの語の多義を記述するものがほとんどであったが、本研究は、研究代表者の一連の研究により、多義の説明には、関連する語との関係を語る事が不可欠であるということが明らかになったことを元に、近い意味をもつ前置詞との関係において前置詞を研究している。<2点目>慣用句こそがその「棲み分け」を表すという、これまでの研究代表者の一連の研究をもとに、慣用句を鍵として研究している点。<3点目>前置詞研究を相同性研究に応用しようとしている点。日英語の様々な現象が、それぞれの言語ごとに一つの傾向にそっているとする日英語の相同性を求める研究は、従来は、文レベル(受動態など)やそれ以上のレベル(ナラティブの構造など)のものであることが多いのに対して、本研究

は、従来より「機能語」の筆頭ともされる前置詞や格助詞にも同じ傾向が見られることを明らかにしようとしている。<4点目>その研究結果を、大学生の自学自習用教材として活用するとともに、高大連携に生かしていこうとしている点。

本研究の主な成果は、下記に述べる18本の論文、18件の学会発表、そして、1本の教材作成である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 18件)

花崎一夫,花崎美紀,植木宏,藤澤翔,「大学生の英語科指導法に於ける内発的動機付けおよび社会への関心を高め,地域との連携を強める試み:松本こども留学の中学生との中大連携を通じた内発的動機付けと学習支援,および地域連携」『地域ブランド研究』,第11巻,2016年,61-68. 査読有.

花崎美紀,中村伸哉,「大学生の英語科指導における内発的動機付けを高め,小学校の外国語活動の課題を克服するための試み:小大連携を通じた内発的動機付けと学習支援,および地域連携」,『地域ブランド研究』第11巻,2016年,27-40, 査読有.

Miki Hanazaki and Kazuo Hanazaki, “Words that Seem to Denote “places” in English and Japanese: English Prepositions and Japanese Postpositions”, Proceedings of HUIC 2016, 2016年, 査読有.

Miki Hanazaki, “The Semantics of Should Revisited”, 『人文科学論集』2巻,2015年,219-231, 査読有.

Miki Hanazaki and Kazuo Hanazaki, “Teaching Prepositions to Japanese EFL College Students; Bridging Theory and Practice”, International Journal of Language Education and Applied Linguistics, 13巻,2015年,1-10, 査読有.

藤原隆史,花崎美紀,花崎一夫,「高等学校におけるモジュール型言語教材の可能性:使役動詞を中心にした教授法」,『JeLa 日本 e-Learning 学会学会誌』,18巻,2015年,70-77, 査読有.

花崎一夫,花崎美紀,藤原隆史,「英語教育に活用するモジュール型教材の可能性:英文法の学習を中心にして」,『JeLa 日本 e-Learning 学会学会誌』, 2015年, 18巻,95-104, 査読有.

Miki Hanazaki, Kazuo HANAZAKI, Takafumi Fujiwara, Yuma Hayano, Tomoko Kawamura, Yuta Akahane
“ Multidirectional Approach to the

Semantics of Have; Seeking a Unified Way of Teaching its Polysemy to the EFL Students”, 2015 HUIC International Conference on Humanities Proceedings, 2015年, 1-28, 査読有.

Miki Hanazaki and Kazuo Hanazaki “A Pragmatic Strategy for Building Accordance in Discordant Situations; A Case Study on Negative Questions” 2015 HUIC International Conference on Humanities Proceedings, 2015年, 1-25, 査読有.

加藤鉦三, 花崎一夫, 花崎美紀, 「At の意味論」, 『英文学研究』7号, 2015年, 127-135, 査読有.

花崎一夫, 藤原隆史, 花崎美紀, 「認知言語学の知見を活用した使役動詞 Have の分析: よりよい英語教育を目指して」, 『言語教育センター実施報告』4号, 2015年 46-57, 査読有.

花崎一夫, 花崎美紀, 「To の意味論: 英語教育への応用を目指して」, 『英文学研究』6号, 2013年, 39-46, 査読有.

加藤鉦三, 花崎一夫, 花崎美紀, 「To の意味論」, 『日本英文学会中部支部大会 Proceedings』, 6号, 2013年, 169-170, 査読無.

花崎美紀, 花崎一夫, 「Onomasiological な観点からの前置詞 For の意味論」, 『中部英文学』32号, 2013年, 121-124, 査読有.

花崎美紀, 「Should の意味論」, 『グローバル人材育成のための語学教育の可能性』46号, 2013年, 43-64, 査読無.

花崎美紀, 花崎一夫 「For の意味論再考」 『人文科学論集』, 2013年, 第46号, 85-108, 査読有.

花崎美紀, 「相同性という視点から見る, 日米の出産と育児の実際」, 『柿の木』22号, 2013年, 19-84 査読有.

花崎美紀, 「日本語および英語、それぞれの言語文化に見られる相同性についての一考察: As の意味論を中心に」, 『HLC 言語と人間』2013年, 1-1 査読有.

[学会発表](計18件)

Miki Hanazaki, Takafumi Fujiwara, Kazuo Hanazaki, and Satoru Kikuchi, “Correlation between Logical Thinking, English Ability and Pedagogy: Practicing Government Course Guideline” MICELT 2016, International Conference on English Learning and Teaching, 2016年3月30日, Universiti Putra Malaysia.

Miki Hanazaki, Kazuo Hanazaki, Takafumi Fujiwara et al. “The Similarities and Differences between

English and Japanese” HUIC International Conference on Arts and Humanities, 2016年1月8日、University of Hawaii.

Miki Hanazaki and Kazuo Hanazaki, “Words that Seem to Denote “Places” in English and Japanese”, HUIC International Conference on Arts and Humanities, 2016年1月8日、University of Hawaii.

Miki Hanazaki and Kazuo Hanazaki, “Entrenchment of a grammatical item in a multilingual world; An Effective Way of Teaching and Learning Negative Questions in English and in Japanese”, Applied Linguistics Association of Australia, 2015年12月1日, University of South Australia, Adelaide, Australia.

花崎美紀, 「相互行為に見られる調和: 不調和を解消する相互行為の一方策としての否定疑問文」, 日本英語学会, 2015年11月21日, 関西外国語大学.

Miki Hanazaki and Kazuo Hanazaki, “Strategies for Conveying Requests in Discourse: In Relation to the Japanese and American Identities”, 5th Discourse and Society International Conference, 2015年11月14日, Malaya University, Malaysia.

花崎一夫, 花崎美紀, 藤原隆史, 「英語教育に活用するモジュール型教材の可能性: 英文法の学習を中心として」, 日本 e-Learning学会, 2015年10月23日、静岡県立大学.

藤原隆史, 花崎一夫, 花崎美紀, 「高等学校に於けるモジュール型言語教材の可能性: 使役動詞を中心とした教授法」, 日本 e-Learning学会, 2015年10月24日, 静岡県立大学.

Miki Hanazaki and Kazuo Hanazaki, “The Effectiveness of Using Modular-Style Teaching Materials in Teaching English Prepositions to Japanese College Students”, ICOLLT, International Conference on Language Learning and Teaching, 2015年10月2日, Kuantan, Malaysia.

Miki Hanazaki and Kazuo Hanazaki, “A Study on Negative Questions as Pragmatic Strategy for Overcoming Discordance”, IPRA International Pragmatics Association, 2015年7月31日, Antwerp University, Belgium.

Miki Hanazaki and Kazuo Hanazaki, “A Case Study on Negative Questions”,

ICLC International Cognitive Linguistics, 2015年7月23日、Northumbria University, UK.
Miki Hanazaki and Kazuo Hanazaki, "A Pragmatic Strategy for Building Accordance in Discordant Situations: A Case Study on Negative Questions", 2015 HUIC International Conference on Arts, and Humanities, 2015年1月3日、University of Hawaii.

Miki Hanazaki, Kazuo Hanazaki, Takafumi Fujiwara, Yuma Hayano, Tomoko Kawamura, Yuta Akahane "Multidirectional Approach to the Semantics of Have; Seeking a Unified Way of Teaching its Polysemy to the EFL Students" 2015 HUIC International Conference on Arts, and Humanities, 2015年1月4日, University of Hawaii

Takafumi Fujiwara, Yuta Akahanane, Ryota Wakibuchi, Yuma Hayano, Miki Hanazaki, Kazuo Hanazaki, "An Analysis of a Causative Verb Have from the Cognitive Linguistics as well as the Contrastive Linguistic Perspective" HUIC International Conference on Humanities, 2014年1月4日, University of Hawaii.

Ryota Wakibuchi, Yuta Akahane, Takafumi Fujiwara, Yuma Hayano, Miki Hanazaki, Kazuo Hanazaki "The "Habitat Segregation" of Expressions Denoting Futurity, and Its Application to TESL", HUIC International Conference on Humanities, 2014年1月4日, University of Hawaii.

加藤鉦三,花崎一夫,花崎美紀, "Atの意味論", 日本英文学会中部支部第65回大会, 2013年10月5日, 椋山女子大学.

花崎美紀, "英語らしい英語と英語から考える多様性", インターアクト地区大会, 2013年7月21日, 松本大学, 招待講演.

加藤鉦三,花崎美紀,花崎一夫, "Toの意味論" 日本英文学会中部支部, 2013年10月10日, 椋山女子大学.

〔図書〕(計4件)

花崎一夫,花崎美紀『英文法で学ぶ英会話: 英文法の知識を活用して会話力をつけよう』, ブイツーソリューションズ, 2015年3月, 総ページ105.

花崎一夫,花崎美紀, 『パターンで学ぶ英会話: 英語の型を覚えよう』, ブイツー

ソリューションズ, 2013年4月, 総ページ155.

花崎美紀,磯部美穂,花崎一夫他『グローバル人材育成のための語学教育の可能性』, ブイツーソリューションズ, 2013年3月, 総ページ数103, 担当全編集および43-64.

花崎美紀 『自習用教材作成・高大連携・相同性研究に生かす,慣用句を鍵に行う前置詞棲み分け研究』ブイツーソリューションズ 総ページ267, 2012年3月.

〔その他〕

自習用教材1件

前置詞 To に関する自習用教材 (Available online on Shinshu University, e-Alps)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

花崎 美紀 (HANAZAKI, Miki)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号: 80345727